

「若きウィーン派と日本」

西村雅樹

1. 「若きウィーン派」
19世紀末から20世紀初頭にかけてのウィーン
ヘルマン・バル、フーゴ・フォン・ホーフマンスタール、アルトゥア・シュニツラー等
「モデルネ(現代性)」を掲げた文学活動
2. 「カフェ・グリーンシュタイドル」
「若きウィーン派」ゆかりのコーヒー店
「ロリス」に記されたバルとホーフマンスタールの出会い
3. 「分離派」の「日本美術特集展」
1900年1月の「分離派」第6回展
アードルフ・フィッシャーの収集品
4. バルの「日本展」への批評文
日本の芸術がヨーロッパの芸術に与えた三点の影響
ペーター・アルテンベルクの日本美術評
5. ある日本人画家の芸術観に関するバルの理解
アードルフ・ホイトラーによる画家鈴木松年探訪記
絵画の中の人物と風景に関する鈴木松年の説
バルが日本人に観て取ったあらゆる事物の連関についての原感覚
日本人の感性と対比されたヨーロッパ人の概念
6. 戯曲『マイスター』でのバルの西洋の理性重視批判
日本人が登場する戯曲『マイスター』
マイスター・エックハルトの現代語訳の影響
理性に重きを置く主人公ドゥーア
脇役の日本人医師による西洋の理性重視批判
7. 「心博士」という日本人登場人物の名
日本人へのバルのシニカルなまなざし
ラフカディオ・ハーンの『心』に由来する登場人物名
西洋の「理性」と東洋の「心」の対比
8. ホーフマンスタールのハーンの『心』への関心
ホーフマンスタールによる『心』翻訳の試み
別の訳者による訳書のエーミール・オルリクによる装丁
ホーフマンスタールのハーン追悼文
9. 西洋化する日本への反発
ハーンの見通しとは異なった日本の近代化

- 軍事大国化する日本へのシュテファン・ツヴァイクによる批判
日露戦争がヨーロッパの人々に与えた衝撃
10. バールが指摘する日本が抱える二重の困難
革新が必要な段階に達している日本文化
日本が手本にした西洋文化が抱える同様の問題
 11. ホーフマンスタールによる未完の「日本人とヨーロッパ人の対話」構想
1902年の夏に記された「日本人とヨーロッパ人の対話」構想
完成を難しくさせた、日本をめぐる状況の変化
この構想の「帰国者の手紙」への展開
「全一なる体験」に対比された「概念」
 12. 「シャンドス卿の手紙」と日本人に関わる作品構想の関連
概念の言語への批判を主題にした「シャンドス卿の手紙」
『空想対話書簡集』に両作品が共に収められた可能性
 13. 「シャンドス卿の手紙」へのマウトナーの反応
『言語批判論集』の著者フリッツ・マウトナーのホーフマンスタールへの書簡
ホーフマンスタールのマウトナーへの返事
両者の言語批判の異同
 14. ホーフマンスタールのマウトナー批判
日本人に関わる作品構想中でのマウトナーの学問に対する否定的言辞
マウトナーを評した「ヴィルベルプункト」という表現
 15. インド学者ノイマンへの両者の共通の関心
カール・オイゲン・ノイマンへのホーフマンスタールの高い評価
ノイマンの影響を受けたマウトナーの『ゴータマ・ブッダの最期』
マウトナーの仏教理解
『哲学辞典』に示されたマウトナーの神秘主義
 16. バールのマウトナー批判
思想的変転を重ねた末カトリックに復帰したバールのマウトナー観
徹底した「無」の立場へのバールの理解と批判
『無神論と西洋におけるその歴史』で示されたマウトナーの「神なき神秘主義」
 17. カトリックに復帰する直前のバールの宗教性
1912年刊行の評論集『総点検』中の宗教的信条にあたりとされる文章
「神」と「神性」の根本的相違を説くエックハルトへの共感
1913年のクリムト論中の「神」を「無」として捉える表現
1914年以降キリスト教色を強めた後にも見られるユダヤ系思想家との対話の姿勢
 18. ホーフマンスタールにとっての西洋と東洋
1922年に発表されたエッセイ「ギリシャ」
精神の目で感じ取られる光についての記述
日本に関わらせて示されていた全一なる体験という問題意識の発展
「本源の純粹なる相」における西洋と東洋の差異を超えての結びつき

参考資料2

1. 「日本人は花盛りの枝を一本描く。するとそこには春のすべてがある。我々の方では春全体が描かれる。そしてそこには花盛りの枝が一本あるかどうか。賢明な節約こそすべてだ。」
2. 「絵の中で人物が一個のもう一つの自然より以上のものであるとするならば、それはもはや風景ではなく、季節の姿ではなくなってしまう。」
「人物はせいぜい風景の点景物であり、それ以上ではありえないのです。」
「人物には固有の心情があってははいけません。人物はおそらくは一個の喜ばしい春であり、秋の物悲しい一面なのです。」
3. 「人間も一個の自然にすぎず、自然にあるものは皆同じ一つの情趣を奏で、すべてはある同じ精神のさまざまな現れにすぎないという芸術全般に通ずる奥義が、これら一連の言葉には含まれている。」
4. 「あらゆる事物の連関に関して日本人が持ち合わせている強い感性、花も動物も山も雲も愛する人もすべて、同じものが姿形を変えたのだという世界のあの原感覚とでもいうべき感性がもちろんここでは関わっている。」
5. 「頭では(直訳すれば、概念では)我々もそれはよくわかっている。しかし生き生きとした直接的なものとして感じ取られることは我々の場合まずめったにない。」
6. 「確かにこんなにたくさんすばらしい発明をあなたがたはなさってこられました。... ただし、それで人が幸せになるかということ。」
「あなたがたが理性に重きを置きすぎているがためなんです。そうなんです。まちがっているんです。」
7. 「いいですか、これは我々が努力してようやくかち得た唯一のものなんですよ。理性によって生を統べる技を努力して獲得した。この点で我々は君たちに先んじているわけです。... わずかばかりの発明のおかげでね。」
8. 「大変小柄で華奢」
「子猿のようにすばしこくかわいらしい」
9. 「『マイスター』にとって日本人の医師は私にはますます重要になってきている。」
10. 「その文章には深くて捉えることの難しいものが、まるで深い海の底から光の中へ運び出されたように次々に並んでいる。私の間違いでなければ、それは哲学である。しかし、だからといって私たちが冷たいままに放っておくことはない。それは私たちが概念や観念の荒地へ引き込むことはない。だからそれは宗教とも言える。しかし宗教とは言いながら、人をおどしたりはしない。世界で自分だけが存在しようとはしない。それは心の重荷にはならないのである。だから私はそれを福音と呼びたい。」
11. 「もちろんすでに当時、ハーンにとっての日本の傍らで別の日本が育ってきていた。戦争の準備をし、ダイナマイトを生産し、魚雷を製造する日本、あまりにも急激にヨーロッパになろうとしたあの貪欲な日本が。」
12. 「オーストリアのある若い外交官とヨーロッパに精通した日本の老賢人の対話」

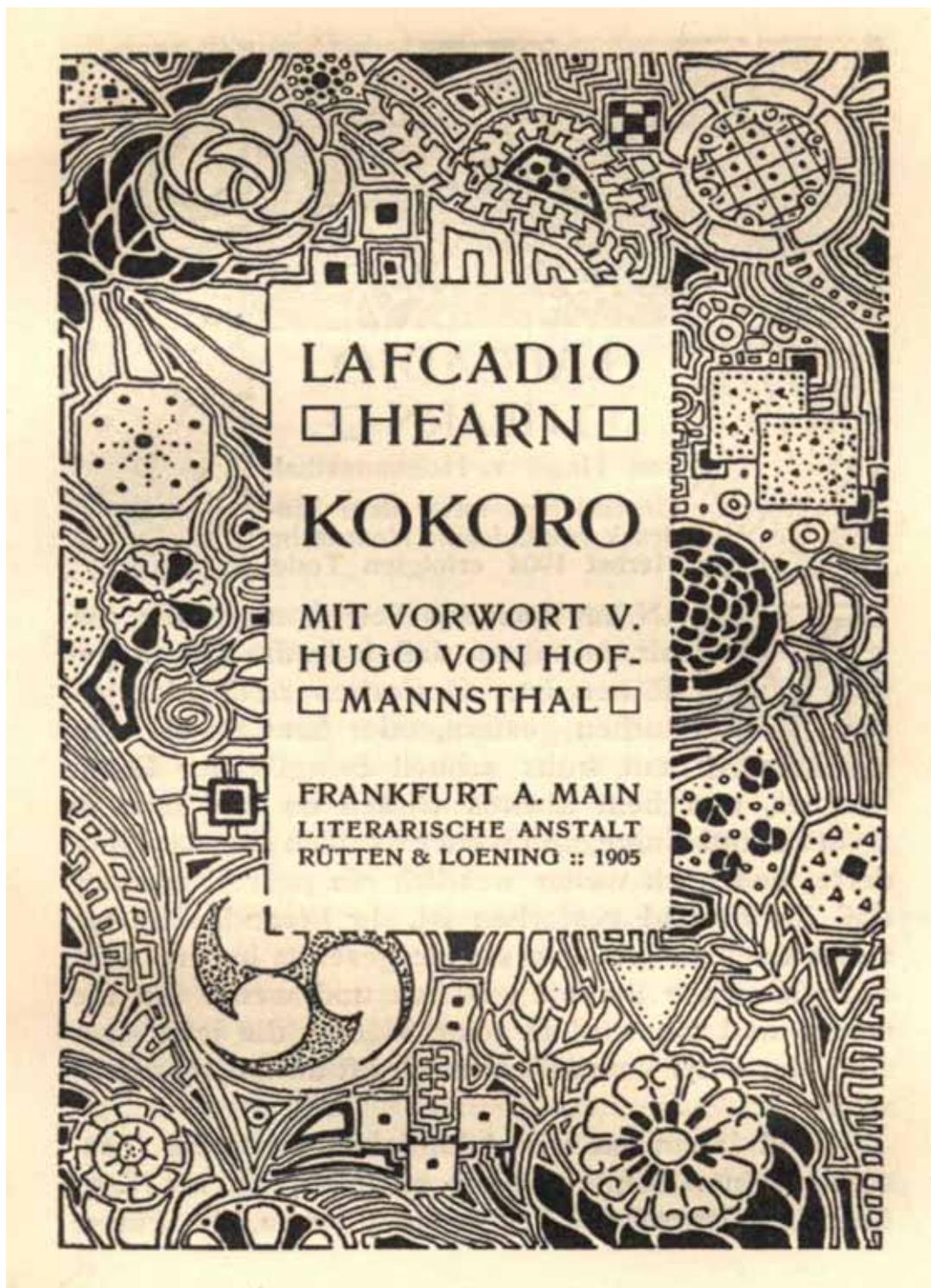
- 「ある若いヨーロッパ人と日本の貴人の対話」
「日本の士官の話」
「ある日本の貴人がドイツにいる息子に当てた書簡」
13. 「全人一時に動くべし (The whole man must move at once.)」
 14. 「あなたがたは何かを体験するとして、...それを決して全一として体験しない。」
 15. 「今しがた ある一通の書簡 (シャンドス卿の手紙) を読み終えたところです。私の『言語批判』の最初の文学的反響のように思いながら拝読した次第です。...私が夢見ていた最上の結果を体験できたように思っております。」
 16. 「あなたがたの建物はひどい、生ける者の墓場。あなたがたの学問はひどい (その最たるもの (Wirbelpunkt), マウトナー)。」
 17. 「無を彼 (仏陀) は褒めたたえていた。今や彼は無であった。そしてそれをもはや知ることでもなかった。全てが一なることを彼は教えていた。...今や彼は全体と一体であった。そしてそれを知らなかった。そして彼がそれを全然知らなかったが故に、全く一体であった。」
 18. 「自我と世界とすべての 差異 と、さらには言葉による欺瞞すべてをも無きものとする、まったく無と化した無」
「懐疑による絶望は変容する」
 19. 「今や、そう今、彼はただ手を差し出しさえすればよい。もうほんの少しだけ。そうすれば神は憐れみたもうであろう。」
 20. 「すべては比喩にすぎない。しかし、すべてが比喩にすぎないからこそ、その比喩がすべてである何かがあるに違いない。」
 21. 「個々のものはすべてであり、すべては無である。というのも、無は神に他ならないからである。そして神がある所、神は完全であり、神が離れ去る所に残るのは、空虚である。...現象は何一つとして本質そのもの足りうるわけではないが、現象すべてに本質は宿りうるという、現象全体の交換可能性が、彼を魅惑するのである。」
 22. 「聖体の奇跡によって人間の生は神のものとなった。神様が人々の間に住まわれて以来、地上の眺めが一新されたということ、森の動物であっても、山の岩や石であっても、流れ行く雲であっても、ひそやかに喜ばしく不可思議に何らかの形で感じているに違いない。」
 23. 「誇張してはならぬ。混淆してはならぬ それぞれを個々に凝視せよ。ただしその本源の純粋な相において。分かつな。一を他へ押しやるな。すべては分かたれ、すべては結ばれている。心静かに保て。息づき、味わい、そして在れ。」
 24. 「この完全性こそ、私たちが根ざす文化の究極の言葉なのだ。ここには西洋だけがあるのではなく、東洋だけがあるのでもない。こうして私たちは両方の世界に属しているのだ。」



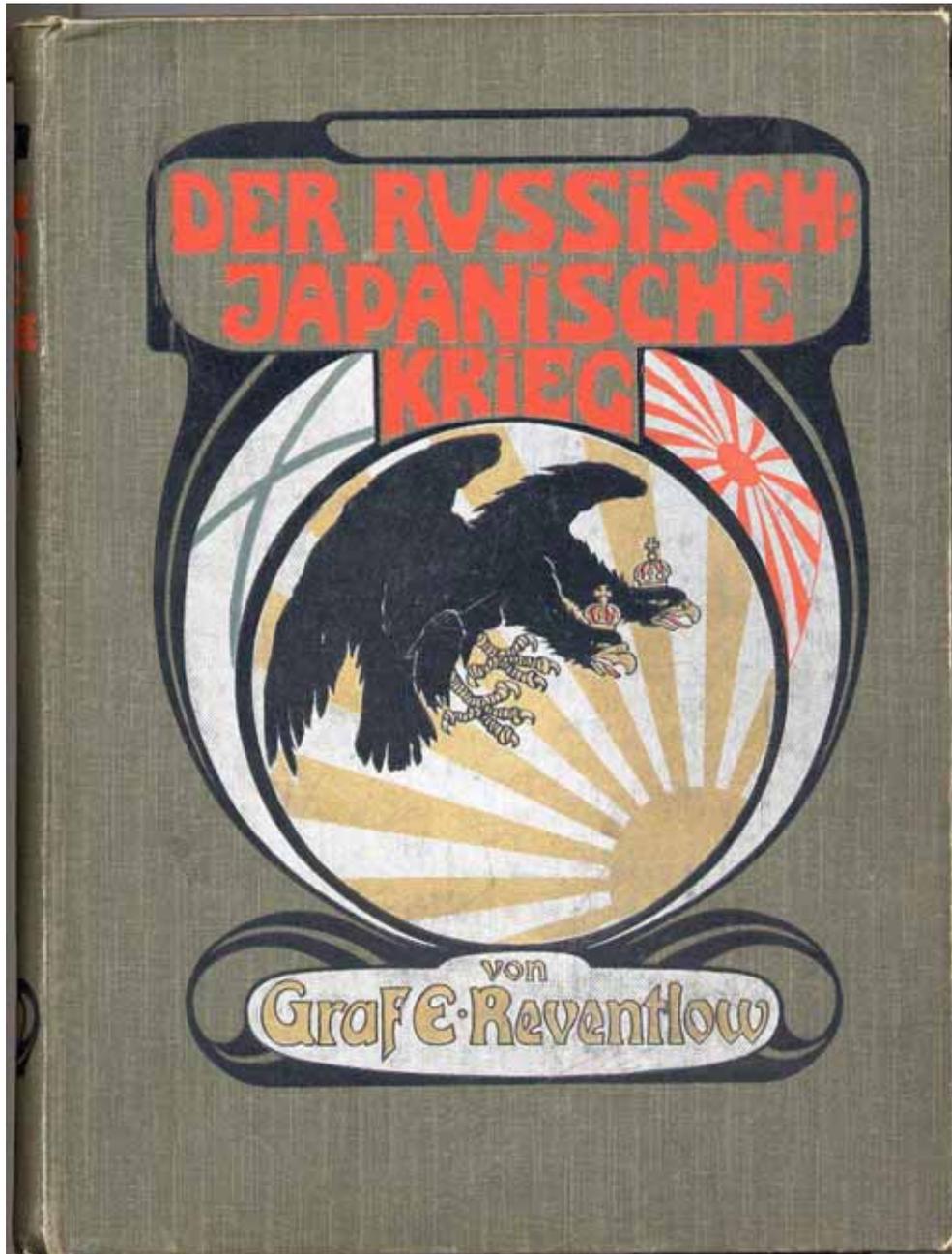
参考資料3 - 1 : カフェ・グリーンシュタイドル



参考資料3-3：鈴木松年「龍」(『京都大家画鑑』より)



参考資料3 - 4 : ラフカディオ・ハーン『こころ』ドイツ語訳



参考資料3 - 5 : 日露戦争を扱った書物